



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

宇多田ヒカルの「私」②

宇多田ヒカルと「インド」を無理やり結び付けるとは、誠にインド大魔王さまらしい、と思った読者諸氏もおられるだろう。その通りなのだが、ここは無理やり結び付けてみよう。

宇多田は1998年に「Automatic/time will tell」でデビューした。15歳でミリオンセラーになったのである。歌詞の意味は分からなかったが、心地よい不思議なリズムが耳にはいてきた。圭子の怨歌と全く異なっていたことぐらひは、わが輩のような「おっさん」にも理解できた。

十代の娘が巨万の富と名声を得たら、次に得たいとおもうものは何であろうか。「わたし」だとわが輩は思う。生まれたときの「わたし」か、今の「わたし」か、将来の「わたし」か、とにかく不安といくばくかの虚無感が「わたし」に向かわしめるのである。

宇多田は長野県のある宿泊施設を訪れた。ここは自然派で、ときにヨーガ・セミナーも開かれている。売れっ子歌手なら最高級ホテルに泊まるだろうが、なぜかこの施設を選んだ。ここで宇多田は無名のアーティストT君（画家）と「恋らしきもの」におちた。実は、わが輩はT君の母親Mさんと交流があった。Mさんはチベット画家でインドのシャーンティニケートン大学に留学していたことがあった。また近所に住んでいたこともあった。お互い母親の介護で苦闘しているときで、いろいろと悩み相談をしていた。そのような関係でT君が小学生のころ一度会ったことがある。

英国に移った宇多田とT君は破局することになったが、宇多田の「わたし」探しは続いていたのだろう。それが、「何色でもない花」の歌詞として結実したと思える。

宇多田は「量子力学」に関心があるそうだが、わが輩はその知識がなかった。このエッセイを書いているとき、たまたま大僧正様から人間学を学ぶ月刊誌『致知』(Chichi)をご恵送頂いた。「仏教と量子力学の融合が世界平和をひらく」という対談の記事があった。

次に大僧正の「対談者の説」から引用してみよう。

量子力学は、分子や原子より小さい「素粒子」を扱う学問である。素粒子は、粒子というより「波」である。波のように現れたり消えたりする実体のない不確かで曖昧な存在である。われわれの身体は実体のない素粒子の集まり、「雲のようにモワモワした曖昧な存在」である。

ここまでは科学的なのだが、次は宗教ぽくなる。

素粒子の一つ「フォトン」が私たちの意識や感情をつくっている。「私たちは普段から無意識のうちにフォトンに意識や感情を載せて発振（はっしん）、もっといえばフォトンの波（周波数）を飛ばしている」

「悔しい」という思いを抱くと悔しい波が、「幸せだ」と思えば「幸せ」の波が発振され、他と共

振されるといふ。共振すれば家族や皆が平安になる。

わが輩はバリバリの文系なので、理系の対談者の知識には及ばない。しかし、それでは宇多田の「わたし」は解決されないのではないか、と思っている。

さて、本題にかえて宇多田の歌詞をインド風に解釈してみたい。

聖者シャンカラがいうように、この世界は幻である。誠にこの世は虚しいものに違いない。何ものも鴨川のように流れ去る。生まれたら死ぬし、会えば別れることになる。それではあまりにも人生は虚しすぎる。流れない「水そのもの」もあるし、生死を超えた「もの」があると思えなければ生きていく意味がないように思える。その「もの」が「真理」というもので、それを知るには「私」を知ること以外に手立てがない。「私」が〈在る〉こと以外のものは、すべて不確実な「幻」だからである。

I' m in love with you

In it with you

宇多田の歌詞 In it with you (その中であなたと一緒に) の it は、「愛」と解釈するとすんなり理解できそうだが、インドにも似たような It がある。「ソーハム(SO-HAM)」(私はそれである、I am it 又は that) というマントラがある。梵我一如のことである。It あるいは That は〈梵〉のことで、ことばで説明できない宇宙生命体とでもいえようか。宇多田が深い読みをしていたなら、この歌詞は深遠な〈梵〉を意識していたのかもしれない。

「わが輩=宇宙」である、などと公言すれば、ばかにされること請け合いである。それをどうやって証明するのか。インド哲学だって証明は困難である。「我はそれなり」は結論であって、段階的、論理的に証明されたものではない。「我」と「それ」の間を埋めなくては証明にならない。

その証明法の一つに、物としての「人間」を手立てとして探る方法がある。人間が死ねば灰になる。その灰が土になって草木を育て、人を産み出すことになる。人間=物=世界の循環の思想である。つまり人間を分子や原子、素粒子などの物として切り刻んでいくことになる。

そこにウタダ・ヒカルは在るか？ それで宇多田ひかることが分かるか？ (否)

昔アーグラの町医師から高い授業料を払ってレクチャーを受けたことがあった。マントラ「ソーハム」を呼吸とともに繰り返し唱えていると精神的に落ち着くということであった。なるほど、少しは落ち着いた。たぶん「そーらん(節)」でも、繰り返していると落ち着くだろう。なぜなら、それは心理学的な浅い自己暗示に過ぎないからである。

哲学的には「ソーハム」は〈禁句〉と言ってもよい。It あるいは That は「神さま」と訳されることもある。わが輩=神さま、と言い張るのは怪しげな教祖グルぐらいである。「ソーハム」は優れた修行者のみが、〈秘密裏〉に語られることである。なぜなら、それは言語を超えた論理的証明が出来ない深い体験に基づくからである。

われ等が心理学的技法として「ソーハム」を唱えるのはよいが、ゆめゆめ「我は It なり」(梵我一如) などと思違いしてはいけない。

われ等俗人に勧められることは、夜に天空を見上げて「ああ、星たちはきれいだ！」と感動し、早朝にご来光を拝して「ああ、今日も生かされている！」と胸いっぱい息を吸い、昼に「あれれ、まだまだ元気だ！」と息をため、夕刻にサンセットを眺めて「ああ、今日もありがたかった！」と息を抜くことぐらいである。